

他者作品との関わりを通じた表現の自覚性獲得過程についての検討

Emergence of control in artistic expression in amateurs: The effects of imitation of unfamiliar exemplars

石黒千晶[†], 岡田猛[‡]

Chiaki Ishiguro, Takeshi Okada

[†]東京大学大学院学際情報学府, [‡]教育学研究科, 情報学環

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies/Graduate School of Education, The University of Tokyo

qq116201@iii.u-tokyo.ac.jp, okadatak@p.u-tokyo.ac.jp

Abstract

The creation of a work of art has been indicated to result from 'expressive awareness', achieved as the artist matches images and methods. This study examines how novices, who tend to express reproductively, acquire such expressive awareness over several weeks of practice of photography. We conducted case studies with two conditions: 1) one participant reflected only her own creative activities, and 2) one participant imitated eminent works of creative expression in the domain. As a result, the participants acquired expressive awareness in both conditions, though the contents of the expressive awareness were different. The imitation participant started to practice creative expressions and tried to control her creation consciously, while the reflection participant started to focus on precision of methods of expression.

Keywords — Art, Creativity, Expressive awareness, Imitation, Photography

1. はじめに

芸術は人間にとって重要な営みの一つである。このような芸術の重要性に着目して、最近では心理学においても芸術を含む創造活動が研究され始めている。このような研究が進むことで、人間の認知プロセスの解明や、創造的熟達者育成のための多くの示唆が得られるだろう。芸術創作における認知プロセスについての先行研究では、作品創作には、アイデアやコンセプトを生成するプロセスと、作品そのものを具体化するプロセスが存在し、互いの関係が調整されていることが示唆されている（例えば、[14,20]）。

内的プロセスと外化プロセスが互いに関係し合って進む創造プロセスにおいては、制作中のプロダクトが自分の作品に対するアイデアやコンセプトといった内的イメージに合致しているか、または内的イメージを達成するためにどのよ

うなプランニングや方略が有効なのかを判断する活動が重要な役割を果たすと考えられる。このようなメタ認知[8]に関わる活動は、創造活動において重要な認知であり、熟達したアーティストは頻繁に行うのに対して、創造活動を行っていないノービスの創作過程ではほとんど行われぬ[7]。本研究では、アイデアやイメージ・コンセプトを「表現内容」、それを実現するためのプランニングや方略のことを「表現方法」、さらに、両者の関係調節についての意識を「表現の自覚性」とする。そして、「表現の自覚性」を、自己の制作プロセスをモニタリングする意識の芽生えとして捉え、それがどのように獲得されるかを検討する。

この問いを検討するため、本研究では創造領域として写真芸術を扱う。なぜなら、写真撮影で絵画などの他の創造領域と比べて短期間でより多数の作品創作が可能であるため、熟達プロセスの検討には適した創造領域と考えられるからである。そこで、本研究では数ヶ月間で見られる芸術写真表現の熟達プロセスを検討する。

表現の熟達プロセスを検討するに当たって、まずは表現の定義を確認しよう。近代以前は、宗教や歴史といった既定のモチーフにそれらしい印象を与えることが表現であった[5]一方、近代以降は創造主体の体験や感情、さらには無意識化された体験を生き生きとした存在感のある実在にすることが表現だと考えられるようになり[2]、現在はそれぞれの表現内容に応じて両方の表現が存在していると考えられる。このような表現スタイルの違いは表現の熟達にも影響する可能性がある。従って、本研究では表現を、創作主体の体験

に対する解釈や感情を表現内容とする「創造的表現」、創作主体の主観に関わらず、風景や静物など外界に存在するものを表現の対象とする「再現的表現」との2つに分類して捉える。

以上で定義した表現のうち、初心者は再現的表現を行うと考えられる。芸術について専門的知識を持たないノービスは、一般的に写実性の高い作品を評価し（例えば、[4, 15, 13]）、絵画の評価観点として描画要素の理解しやすさを重視することが示されている[16]。さらに、石橋・岡田は、絵画の専門的教育を受けていない初心者に対して自然物を題材にして独自の作品を描くように教示したところ、写実スタイルに分類される作品が描かれたことが報告されている。以上の知見から、初心者は鑑賞・創作において再現的表現を好む傾向があることが推測できる[11, 12]。

このような傾向を持つ初心者の表現の自覚性獲得に重要な要素は何だろうか。一つは、表現活動への参加・継続であろう。これは、表現活動を継続する中で、自己の作品や創作プロセスについて自己説明[1]や、内省[17]を行うことが、知識獲得を促していると考えられるからである。従って、ノービスであっても、ある創造活動に参加し継続して繰り返し作品を制作し、自己の創作について内省を行うことで、表現の自覚性を獲得することは可能であろう。

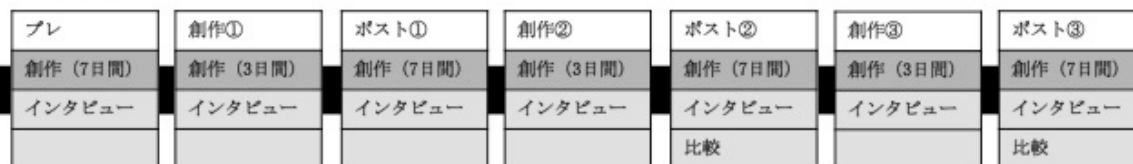
加えて、ある創造領域の既存の作品に関わることも、創造活動の熟達には重要であると考えられる。Csiksentmihalyi は、創造は個人内で完結するものではなく、既にある作品やルール、表象、その方法との関連の中でのみ意味を持つことを指摘している[3]。つまり、既存の作品と関わることは創造についての知識[9]を獲得する機会となり、自己の創造活動の基準となる知識の獲得に影響すると考えられる。

熟達への影響という点から考えると、既有知識に合致しない作品を模倣するという関わり方が効果を持つと思われる。従来から美術教育場面では、既存の作品と関わるための方法として、鑑賞や模倣、模写等が行われてきた。特に模写を含む

模倣は、既存の作品と深く関わるための有効な方法の一つであり、知識や技能の学習という側面のみではなく、新たな創造にも影響を与えることが、石橋・岡田の心理学的実験によっても実証されている[11, 12]。彼らは、絵画について専門的な教育を受けていない初心者を対象にして、被験者の既有知識に合致しない抽象画を模写させる心理学実験を行った。模写の最中、被験者は抽象画の描画意図やプロセスに関する推測を行い、絵画に対して新しい見方の方向付けを獲得した。その結果、被験者は模写後の描画で新しい物の見方を反映した、より創造的な絵画を描くようになった。この研究から、模写のプロセスの中で、作者の意図や制作プロセスの推測が行われ、そこで得られる新しいものの見方がその後の創造における表現内容の生成や表現の自覚性獲得に影響を与えることが推測される。この知見は、写真領域にも敷衍することが可能であろう。写真はメディアとしての写実性を必然的に伴うという点で絵画とは異なるが、写実的な作品であっても創作主体の意図や解釈を表現することは可能である。例えば、著名な写真家であるアンリ・カルティエ＝ブレッソンは、「決定的瞬間」という概念を提唱し、そのテーマに沿って創作を行いながら、鑑賞者に意図やコンセプトを伝えている。このような写真を複数見ることによって、それぞれの写真家の意図をより深く理解することが可能になるだろう。従って、ノービスが創造的表現の写真作品を模倣した場合、創造的表現が可能になり、その後も創造的表現の熟達プロセスを経ると考えられる。

以上の議論から、初心者は再現的表現を評価したり創作したりする傾向があるが、創造的表現スタイルの他者作品に関わるか否かによって、その後の表現スタイルが変化し、表現の熟達プロセスにも違いが生じる可能性がある。具体的には、初心者が創造的表現スタイルの作品を模倣すると、創造的表現の自覚性が獲得され、その後の熟達プロセスでは表現内容と表現方法の両方を練り上げ、両者の関係性を調節することが重視されるだろう。一方、初心者が写真創作と、自己の作品に

ケース① (内省)



ケース② (模倣)

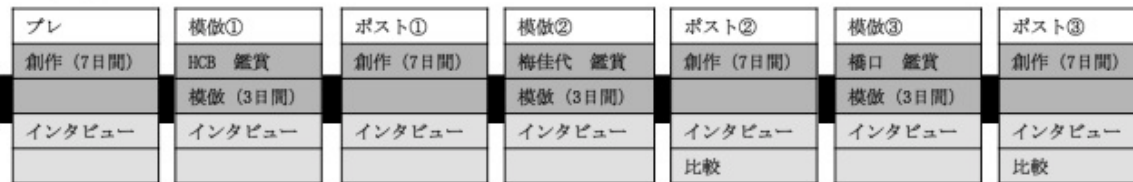


図 1 ケーススタディの手続き

ついでの内省を繰り返せば、再現的表現の自覚性が獲得されるだろう。ただし、創造的表現と比べて表現内容を練り上げる必要性は低いため、より精緻な表現をするための表現方法が重要になるであろう。以上の議論から導かれた仮説を以下の2つに整理する。

(仮説1) 写真について専門的な教育を受けたことのない初心者は、写真創作と、自己の作品についての内省を繰り返すこと、また、既存知識に合致しない著名な他者作品を模倣することで、表現の自覚性を獲得するだろう。ただし、前者は再現的表現の自覚性を、後者は創造的表現の自覚性を獲得する。

(仮説2) 創造的表現の自覚性を得た初心者は、その後の創作では表現内容と表現方法、及び、その両者のマッチングを表現についての知識として創作に利用するようになるだろう。一方、再現的表現の自覚性を得た初心者は、その後の創作では表現方法をより重要視するようになるだろう。

2. 方法

2人の参加者の数ヶ月間の創作の変化を検討するケーススタディを行った。参加者はそれぞれ4回のテスト【プリ、及び、ポスト①～③】と模倣【模倣①～③】、及び、創作【創作①～③】を実践した。

対象者 2名の理系大学生(女性、ケース①は24歳、②は23歳)が個別に実験に参加した。参加

者はそれぞれケース①(内省)、ケース②(模倣)に割り当てられた。いずれの参加者も写真についての専門的教育を受けていないが、写真に興味があり、自発的な研究協力が得られた。

手続き ケーススタディの期間は、ケース①(内省)の参加者は2011年9月30日から11月14日の46日間、ケース②(模倣)の参加者が2010年10月28日から2011年1月21日の86日間である。ただし、各ケースの期間が異なるのはケース②(模倣)の期間に長期休暇が入ったためである。また、その期間創作は中断されていた。

各参加者は個別に実験に参加し、実験参加の前日に一眼レフカメラの基本的な使用方法(カメラの仕組み、絞り、シャッタースピード、露出の操作方法)を学習し、第一著者と使い方の確認を行った。

【プリ、及び、ポスト①～③(一週間)】は、それぞれ自由に写真作品を創作するセッションであった。ケース①(内省)とケース②(模倣)の参加者は、一週間自由に写真撮影を行い、40枚以上の写真作品を作ることを教示された。ケース①(内省)の【創作①～③(三日間)】では、自由に写真作品を創作し、20枚以上の写真作品を作ることが求められた。一方、ケース②(模倣)の【模倣①～③】では、まず著名な写真家の写真集の鑑賞を行い、写真集から「一番いいと思う写真」を選び、次に、その写真を撮影するために写真家が気をつけていることや注意していること

表 1 表現の自覚性、及び、表現内容・表現方法の定義

カテゴリ	定義	例
表現内容	再現的表現内容	被写体の特徴や様子、雰囲気、また、それらの知覚的な印象についての発言。 道ばたの花のかわいらしさを、そのまま捉えることとか、パーティーの楽しい雰囲気や臨場感を写真にも反映することも大切ですね。
	創造的表現内容	撮影に先行するコンセプトや、自己の視覚的体験に対する主観的な解釈についての発言。 自分が写真を通して伝えたいことと、周囲の風景から感じ取ったことみたいな抽象的な考えも作品に出せるといっています。
表現方法	構図、アングル、絞りやシャッタースピードの調節など、撮影に必要な技術や、撮影にあたって行うべき方略についての発言。 何度も撮ってみて、画面やフレーム内の被写体のバランスを合わせるとか。一度で思った通りの写真が撮れるようにテクニックを磨く。	
表現内容と表現方法のマッチング (表現の自覚性)	再現的表現の自覚性	上記で述べた表現内容と表現方法の両者に対応関係を持たせたり、両者の関係性を調節したりすることについての発言の中で、表現内容が特に再現的であるもの。 自分が見たままの世界が表現できるようににカメラの設定の調節や、構図、アングルの調節をするようにしています。
	創造的表現の自覚性	上記で述べた表現内容と表現方法の両者に対応関係を持たせたり、両者の関係性を調節したりすることについての発言の中で、表現内容が特に創造的であるもの。 自分が写真を通して伝えたいコンセプトに合うように構図、アングルの調節をするようにしています。

を考えながら、それを実践し、20枚以上の写真作品を作ることを教示された。このような模倣、及び、創作のセッションとポストテストをそれぞれ3回繰り返し、計7回のセッションを行った(図1を参照)。

全ての写真は、CanonEOSKissX3 (EF-S18-55mm F3.5-5.6IS レンズ)で撮影した。また、一眼レフによる表現を意識させるために、「マニュアルモード」・「シャッター速度優先モード」・「絞り優先モード」の3つのモードのみで撮影し、写真は消去せず全て残すことを参加者に教示した。各セッションの後には第一著者がインタビュー(模倣条件は約1時間、内省条件は約30分)を行い、インタビュー内容はICレコーダーとビデオによって記録した。インタビューでは、当該セッションで撮影したすべての写真の中から、出来がいいと思う作品を【プレ・ポスト】では10枚、【創作、及び、模倣】では5枚、参加者に選ばせた。そして、選択した写真について、またそれらの写真以外にも参加者が評価している写真があれば、それについても内省報告を求めた。

模倣課題 既存知識構造と合致しにくい作品の模倣が創造を促進する[12]ことが示されているため、3回の介入で模倣課題として利用した写真は、ケース②(模倣)の参加者への【プレ】におけるインタビューから、本人にとって馴染みが薄い3つの異なるスタイルのものであった。具体的には、

【模倣①】にアンリ・カルティエ=ブレッソン(以下HCBとする)、【模倣②】に梅佳代、【模倣③】に橋口譲二を模倣課題とした。¹

分析の指針

本研究の分析の対象としたのは、各セッションのインタビューにおける写真観、及び、個々の写真についての内省報告である。分析では、まず、仮説1を検証するため、写真観についての内省報告、及び、個々の写真についての内省から、表現の自覚性が各ケースで獲得されたかどうかを検討する。仮説2の検証では、写真観、個々の写真についての内省における熟達的变化、インタビュー中のエピソードを検討する。

表現の自覚性と表現の熟達 仮説1、及び、2を検証するため、写真観についての内省に表現の自覚性が見られるかどうか、さらに、個々の写真における内省がケース間で時系列にどのように変化したかを検討した。

写真観の変化 各セッションのインタビューで行った「どんな写真が良い写真だと思いますか」「良い写真を撮るにはどのようなことが効果的だと思いますか」という2つの質問への回答を写真観についての内省とした。この内省における、「表現内容」「表現方法」「表現内容と表現方法のマッチング(表現の自覚性)」という3つの観点につい

¹ 写真集は[10, 18, 19]を使用した。

表 2 個々の写真創作実践プロセスにおける発言内容のカテゴリ

	カテゴリ	定義	例
表現内容	記録・再現	被写体の特徴や様子、雰囲気、また、それらについての知覚的な印象についての発言。	光の感じも暗さも、あ、この夜の暗い中でこういうのがあったんやなっていうのがうまく伝わったかな
	意図・解釈	撮影に先行するコンセプト（ただし、シャッタースピードや絞りなど基本的なカメラテクニックの実践は含まない）や、被写体から読み取ったストーリーや、被写体を見たことで得た主観的な解釈についての発言。	あたし的にはこれはすごくストーリー性があって好きというか、伝えたいことっていうか。
表現方法	カメラテクニック	絞り、シャッタースピード、露出などによる光量の調節、また、被写界深度/ピントの調節、などするためのカメラの操作についての発言。	明るすぎないように絞りとか、あとはちょっと露出もいじった
	フォトテクニック	構図、アングル、被写体への迫り方（被写体に対する向き、撮影場所）の調整など、カメラテクニック以外で対象を表現するために、撮影者が能動的に行う方略についての発言。	構図とかも面白いかな、って思っで。なんか画面の三分の一くらいのところのさ、こっち(左)よりこっち(右)にしか目が行かないように多分なっで、こっち(左)ってほとんど見られなくてとか
表現内容と表現方法のマッチング (表現の自覚性)	マッチングの成功	既存の撮影方法や写真を真似るのではなく、自分で表現内容に対応した表現方法を考え、実践したことについての発言。	人だけ撮影しても、背景(図書館)がわからなくなるので、アップしたり引いたりして、どのくらい被写体に迫るべきかを考えた。
	マッチングの失敗	表現内容と表現方法のマッチングに意識的であったにも関わらず、その試みが失敗したことに関する発言。	もっと撮写して、被写体(物)の迫力を表現しなかったが、近づけなかった

での発言の有無を検討し、「表現内容」については、背景と問題意識によって定義した「再現的表現」と「創造的表現」の二つについて分類した。さらに、「表現内容と表現方法のマッチング(表現の自覚性)」の発言があれば、表現の自覚性があると考え、このときの表現内容が「再現的表現内容」であれば「再現的表現の自覚性」、 「創造的表現内容」であれば「創造的表現の自覚性」と判断した(表1参照)。この評定を本研究の目的を知らない研究員に評定させたところ、高い一致率が確認できた($\kappa=0.85$)。この分析によって、参加者がどのセッションで表現の自覚性を獲得し、どのような表現に関心を持っているかを検討することができる。

個々の写真の内省の変化 参加者が【プリ、及び、ポスト①②③】で撮影した写真の中で「出来がいい」として選んだ10枚の写真(計40枚)に関する内省を分析対象とした。これらの内省において、「表現内容と表現方法のマッチング」に関する発言の有無を判断し、時系列に沿ってどのように変化しているかを条件間で比較検討した。さらに、3つの観点のより詳細な変化を捉えるため、観点を表2に定義するような下位カテゴリに分類した(表2参照)。

まず、「表現内容と表現方法のマッチング」については、既存の撮影方法や写真を真似るのではなく、自分で表現内容に対応した表現方法を考え、実践したことについての発言である「マッチングの成功」と、表現内容と表現方法のマッチングに意識的であったにも関わらず、その試みが失敗したことに関する発言である「マッチングの失敗」についての発言があるかどうかを検討した。この評定を本研究の目的を知らない研究員に評定させたところ、高い一致率が確認できた($\kappa=0.96$)。以上のカテゴリはいずれも、創作プロセスにおける表現の自覚性に関わる発言であり、表現の自覚性が獲得されれば「マッチングの成功」についての発言する写真の枚数が増加すると考えられる。

「表現内容」については、被写体の特徴や様子、雰囲気、また、それらについての知覚的な印象についての発言を「記録・再現」、撮影に先行するコンセプトや、被写体から読み取ったストーリーや、被写体を見たことで得た主観的な解釈についての発言を「意図・解釈」として分類し、各セッション

表3 写真観に見られる知識としての表現の自覚性

ケース① (内省)		ブレ	創作①	ポスト①	創作②	ポスト②	創作③	ポスト③
表現内容	再現的表現内容	○	○	○	○		○	○
	創造的表現内容							
表現方法		○	○	○	○	○	○	○
表現内容と表現方法のマッピング (表現の自覚性)	再現的表現の自覚性		○	○	○			
	創造的表現の自覚性							
ケース② (模倣)		ブレ	模倣①	ポスト①	模倣②	ポスト②	模倣③	ポスト③
表現内容	再現的表現内容	○	○	○	○	○	○	○
	創造的表現内容	○	○	○	○	○	○	○
表現方法			○	○	○	○	○	○
表現内容と表現方法のマッピング (表現の自覚性)	再現的表現の自覚性				○	○	○	○
	創造的表現の自覚性				○	○	○	○

注：○は参加者が各項目について発言したことを示す。

ンの写真の表現内容はどちらのカテゴリに当たるかを、写真と内省から判断した。また、この評定を本研究の目的を知らない研究員に評定させたところ、高い一致率が確認できた ($\kappa=.85$)。これらは、参加者が再現的表現と創造的表現のどちらの表現をする傾向があるかを示す根拠となるだろう。

また、「表現方法」についても、絞り、シャッタースピード、露出などによる光量の調節、また、被写界深度/ピントの調節、などするためのカメラの操作についての発言を「カメラテクニック」、構図、アングル、被写体への迫り方（被写体に対する向き、撮影場所）の調整など、カメラテクニック以外で対象を表現するために、撮影者が能動的に行う方略についての発言である「フォトテクニック」についての発言があるかどうかを検討した。この評定を本研究の目的を知らない研究員に評定させたところ、高い一致率が確認できた ($\kappa=.96$)。これは、前者が記録・再現のためにカメラの設定を調節する技術であるのに対して、後者は

構図やアングルの調整といった意図の伝え方に関わる技術だと考えられ、再現的表現と創造的表現の自覚性を支持する根拠となると考えられる。

以上から、個々の写真についての内省から見られる創作プロセスについての表現の自覚性獲得プロセスを詳細に検討することができる

3. 結果と考察

まず、ケース② (模倣) で、本研究で定義した模倣を行っていたかどうかを検討した。分析の結果から、ケース② (模倣) の参加者が【模倣】で撮影した写真にはそれぞれの模倣対象の特徴が反映されていた。この結果の詳細については紙面の都合上、今回は省略する。

次に、表現の自覚性の獲得、及び、表現の熟達 (仮説1, 2) を検討するため、写真観、及び、個々の写真についての内省の変化を調べた。その結果、両ケースで表現の自覚性についての発言が見られ、それぞれケース① (内省) では再現的表現の自覚性、ケース② (模倣) では再現的、及び、創造的表現の自覚性が獲得された (仮説1を支

表 4 各セッションで参加者が、出来がいいとして選んだ 10 枚の写真で
各カテゴリの発言が見られた枚数

		ケース① (内省)				ケース② (模倣)			
		プレ	ポスト①	ポスト②	ポスト③	プレ	ポスト①	ポスト②	ポスト③
表現内容	記録・再現	10	10	8	8	7	6	2	4
	意図・解釈	0	0	2	2	3	4	8	6
表現方法	カメラテクニック	9	7	8	2	4	5	3	2
	フォトテクニック	3	3	2	4	6	4	6	7
表現内容と表現方法のマッチング (表現の自覚性)	マッチングの成功	1	3	1	1	4	6	8	10
	マッチングの失敗	2	0	0	0	0	4	2	3

持)。ただし、ケース① (内省) では表現の自覚性に関する発言が見られた後、その発言がされないセッションが見られた。また、表現の熟達化のプロセスも両ケースで異なり、ケース② (模倣) では表現の自覚性獲得後、表現内容と表現方法、及び、それらのマッチングが全てのセッションで意識されていた。一方で、ケース① (内省) では、表現の自覚性獲得後、表現内容と表現方法のマッチングについての発言が見られなくなり、表現方法の重要性が強調された (仮説 2 を支持)。以下に、詳細な結果を詳述する。

写真観についての内省 「表現の自覚性」は両条件で見られた (表 3 を参照)。この結果から、創作を繰り返していたケース① (内省) では、再現的表現内容が重視され、【プレ】より後のセッションで再現的表現の自覚性が得られた。しかし、【ポスト②】以降は表現方法を重視する傾向にあり、表現内容と表現方法のマッチングがケース② (模倣) ほど、行われなかったことが示唆される。一方、複数の異なる他者に触れたケース② (模倣) では、創造的表現内容が重視され、【介入②】以降はその表現内容と表現方法の関係の調整が表現についての知識として自覚的に利用されるようになったことが示唆される。

個々の写真のモニタリング 「表現の自覚性」が個々の写真撮影にも反映されているかを確認するため、個々の写真についての発話を「表現内容と表現方法のマッチング」の観点から検討した。

「表現内容と表現方法のマッチング」は、ケース① (内省) よりも、ケース② (模倣) において強く意識されていることが示唆された (表 4 を参照)。

ケース① (内省) では、【プレ】から「表現内容と表現方法のマッチング」についての発言が見られたものの、ケース② (模倣) と比較すると、表現内容と表現方法のマッチングについての発言そのものが少なかった。

一方、ケース② (模倣) においても、【プレ】から、「表現内容と表現方法のマッチング」についての発言が見られ【ポスト②】以降では、「マッチングの成功」についての発言が増加した。以上の結果は、ケース② (模倣) の参加者が写真の撮影において表現内容と表現方法のマッチングを意識し、そのマッチングが参加者から見て成功するようになったことを示唆している。

以上の結果から、両ケースの参加者は、表現の自覚性を獲得したことが示唆される。ただし、両者の表現の自覚性には、再現的表現と創造的表現の違いが見られた。

4. 総合考察

本研究では、初心者が数ヶ月創作を繰り返す中で、創作プロセスにおいて表現内容と表現方法のマッチングを調整するための意識である表現の自覚性をどのように獲得するかを検討した。また、写実的制約を持つ初心者が内省を繰り返した場合

と、既有知識に合致しない著名な他者作品を複数回模倣した場合とで、獲得する表現の自覚性の違い、及び、その後の熟達について検討した。

その結果、両方の場合で表現の自覚性についての発言が見られた。ただし、他者作品を模倣した場合は創造的表現の自覚性が獲得された一方で、内省を繰り返した場合では再現的表現の自覚性が見られた（仮説1を支持）。

次に、両方の場合で熟達プロセスに違いが見られた。他者作品を模倣した場合は表現の自覚性の獲得後、表現内容と表現方法のマッチングが表現についての知識として自覚的に利用されるようになった。一方、内省のみを繰り返した場合は、表現方法が重視されるようになった（仮説2を支持）。

以上の結果から、写實的制約をもつ初心者は、表現活動への参加・継続によって創作を繰り返す中で再現的表現の自覚性を獲得することが示唆された。一方、写實的制約を持つ初心者が創造的表現の領域の著名な他者作品を模倣した場合、創作主体の表現スタイルは創造的表現へと変化し、その後創造的表現の熟達プロセスを経ることが示唆された。以下では、本研究が熟達研究に与える新しい知見について詳述する。

表現についてのメタ認知的知識 これまでの熟達に関する先行研究では、熟達者の特徴として、構造化された領域的知識を持つことやメタ認知を利用することが指摘されてきた（例えば、[9]）。このときのメタ認知[8]は、Ericsson, Krampe, & Tesch-Romer が指摘するよく考えられた学習 (deliberate practice)[6]や、Schön がエキスパートの活動に見いだした省察[17]のように、自身の活動全体をモニタリングする認知であり、エキスパートが長期に渡る熟達過程で獲得する知識や認知として検討されている。一方で、エキスパートが個々の問題解決や創作活動をコントロールするためのメタ認知については十分に検討されていない。

本研究では、そのような創造活動についての知識として「表現の自覚性」を定義し、それがどのように獲得されるのかを検討した。その結果、表現の自覚性はある創造活動に参加し、その活動を

継続する中で得られることが示唆された。ただし、創造表現の自覚性を獲得するには、創造活動の繰り返しと内省だけでは不十分である可能性があり、表現の自覚性を維持し、表現についての知識として利用するには、模倣などを通して既有知識とは異なる他者作品と関わることが重要であることが示唆された。

領域的知識に触れることの重要性 本研究では、領域的知識に触れることが、表現の自覚性の獲得に重要であり、熟達過程にも影響することが示唆された。この知見は、新たな創造をするにはある領域に関わり、その領域のルールや特徴を知らなければならないという Csikszentmihalyi の指摘を支持している[3]。

領域的知識に触れることの影響として、本研究では表現スタイルについての制約の緩和という側面と、表現についての知識の獲得の側面が示唆された。創造における制約緩和の側面については、石橋・岡田が、模写が初心者の写實的制約を緩和することを示している[11, 12]。本研究においても、再現的表現を行う傾向がある初心者に創造的表現の他者作品を模倣させたことは同様の効果をもたらしたと考えられる。また、このような制約の緩和は、表現についての知識の獲得にも影響したと考えられる。再現的表現と創造的表現の異なる2つの表現領域に関わったことは、それぞれの表現の違いを理解する機会となり、表現活動における判断基準を意識することを可能にしたと考えられる。一方、再現的表現の創作を続けることは、再現的表現をする上で重要な表現方法への理解を深めたが、表現の基準についての認識を促進することはなかったと考えられる。

謝辞

長期間に渡り、実験に協力くださった研究協力者および評定者の皆様に心よりお礼申し上げます。

文献

- [1] Chi, M. T. H., Bassok, M., Lewis, M., Reimann, P., & Glaser, R. (1989).

- “Self-Explanations: How students study and use examples in learning to solve problems”, *Cognitive Science*, Vol. 13, pp. 145-182.
- [2] Croce, B. (1902). *Estetica come scienza dell'espressione e linguistica generale*, [The aesthetic as science of expression and of general linguistic] (D, Ainslie. Trans.). (Original work published 1902)
- [3] Csikszentmihalyi, M. (1999). “Implications of a systems perspective for the study of creativity”, In R. J. Sternberg (Ed.), *Handbook of creativity*, pp. 313-335.
- [4] Cupchik, G. C., & Gebotys, R. J. (1988). “The search for meaning in art: Interpretive styles and judgments of quality”, *Visual Arts Research*, Vol. 14, pp. 38-50.
- [5] Diderot, D. (1980). “Essais sur la peinture”, In D. Diderot, & G. May (Eds.), *Œuvres complètes*, vol. 14, (Original work published 1980) (佐々木健一 (訳) (2005). *絵画について*)
- [6] Ericsson, K. A., Krampe, R. T., & Tesch-Romer, C. (1993). “The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance”, *Psychological Review*, Vol. 100, pp. 363-406.
- [7] Fayena-Tawil, F., Kozbelt, A., & Sitaras, L. (2011). “Think global, Act local: A Protocol Analysis Comparison of Artist' and nonartist' cognitions, metacognitions, and evaluations while drawing”, *Psychology of Aesthetic, creativity, and the arts*. Vol. 5, No. 2, pp. 135-145.
- [8] Flavell, J. (1976). “Metacognitive aspects of problem solving”, In J. Resnick (Ed.), *The nature of intelligence* (pp. 231-235).
- [9] Glaser, R. & Chi, M. T. H. (1988). “Overview”. In M. T. H., Chi, R. Glaser, R., & Farr, M. J. (Eds.) *The nature of expertise*. pp. xv-xxvii.
- [10] 橋口 譲二 (1996). 職.
- [11] Ishibashi, K. & Okada, T. (2006). “Exploring the effect of copying incomprehensible exemplars on creative drawings”, *Proceedings of the 28th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, pp. 1545-1550.
- [12] 石橋健太郎・岡田猛 (2010). “他者作品の模写による描画創造の促進”. *認知科学*, Vol. 17, pp. 196-223.
- [13] Kozbelt, A. (2006). “Dynamic evaluation of Matisse's 1935 Large Reclining Nude”, *Empirical Studies of the Arts*, Vol. 24, pp. 119-137.
- [14] Mace, M., & Ward, T. (2002). “Modeling the creative process: A ground theory analysis of creativity in the domain of art making”, *Creativity Research Journal*, Vol. 14, pp. 179-192.
- [15] O'Hare, D. (1976). “Individual differences in perceived similarity and preference for visual art: A multidimensional scaling analysis”, *Perception & Psychophysics*, Vol. 20, pp. 445-452.
- [16] Schmidt, J. A., McLaughlin, J. P., & Leighton, P. (1989). “Novice strategies for understanding paintings”, *Applied Cognitive Psychology*, Vol. 3, pp. 65-72.
- [17] Schön, D. A. (1983). *The reflective practitioner*.
- [18] 東京国立近代美術館 (2007). アンリ・カルテイエ=ブレッソン:知られざる全貌: De qui s'agit-il? Rétrospective de Henri Cartier-Bresson.
- [19] 梅佳代 (2007). 男子.
- [20] Yokochi, S. & Okada, T. (2005). “Creative cognitive process of art making: a field study of a traditional Chinese ink painter”. *Creativity Research Journal*, Vol. 17, pp. 241-255.